

目次

○全学共通教育センター

令和5年度国立大学教養教育実施組織会議参加報告……………1

○全学資格プログラムセンター

学生の主体性を引き出すー2023年度前期「教職入門A」の実践の一端から……………2

○高等教育開発デザイン・IRセンター

教学マネジメント～三重大学の教育をより良くするために……………4
令和5(2023)年度前期TA研修実施報告……………5

○アドミッションセンター

「三重大学360° VRキャンパスツアー」を公開しました……………6

発行日

2023年10月12日

編集担当

鄭 漢模

(高等教育デザイン・推進機構 講師)



夏色彩まる三翠会館

令和5年度国立大学教養教育実施組織会議 参加報告(令和5年5月20日(土)オンライン開催)

令和5年度国立大学教養教育実施組織会議に、全学共通教育センターから教員5名(鶴原センター長、大野副センター長、大井センター教務委員長、太城センター情報室長、末原データサイエンス教育センター長)、事務2名(是永学務部教務課長、早川共通教育事務室長)で参加した。会議は全体会議と4つの分科会で開催された。第1分科会の課題は、「数理・データサイエンス・AI教育の必修化について」であった。高知大学の共通教育における数理・データサイエンス教育のリテラシーレベルプログラムについての経緯と現状の紹介、山梨大学、和歌山大学および岡山大学の事例紹介が行われた。概ね本学と同様の手順・経緯で各校の整備が行われていたが、各校ともに教養教育の枠内でデータサイエンスリテラシーレベルの関連科目設定の運用を行っており、情報系と共同運用する体制となっている。本学の様

にデータサイエンス系科目の運用を形式上情報系に割り当てる運用はやや特殊であった(末原データサイエンス教育センター長)。

第2分科会の課題は、「遠隔授業の継続実施について」であった。埼玉大学から、「埼玉大学における遠隔授業実施方針」を定め、「面接授業と同等以上の教育の質が確保される授業科目」に該当する必要があることを明確にしたことが紹介された。続いて茨城大学、岐阜大学、静岡大学から事例紹介があった。コロナ禍を機に加速した授業のデジタル化、遠隔化はまだまだ試行錯誤の段階で良否を結論できず、今後もこのような場で情報共有、意見交換が必要との共通認識がされた(太城センター情報室長)。第3分科会の課題は、「教養教育における地域科目のあり方について」であった。COC+以降、継続的・精力的に「地域科目」を中心とした教養教育を展開している大学の取り組みに

ついて、現状の成果と今後の課題に関する発表が行われた。高知大学：県下の5教育機関における「地方創生推進士」育成のための資格プログラムを実施。弘前大学：1年前期に「青森の〇〇」7科目から1科目2単位を選択必修、1年後期「地域ゼミナール」

2単位を全学必修、2年以降「学部越境型地域志向科目」2単位を選択必修。千葉大学：地域科目「基礎」20科目から1科目を1年次選択必修、地域科目「展開」39科目から1科目を卒業までに選択必修。全学副専攻「ローカル・イノベーション学」。富山大学：「地域基幹産業を再定義・創新する人材創出プログラム『ENGINE』」富山大学+信州大学（幹事校）+金沢大学で連携（大井センター教務委員長）。第4分科会の課題は、「初修外国語（第二外国語）の教育充実化について」であった。琉球大学から同大学におけ

る初修外国語の状況の紹介があり、続いて富山大学、信州大学および徳島大学の事例紹介が行われた。各大学様々な取り組みであったが、1言語習得に必要な学修時間、1言語に必要な単位数を適切に検討することの重要さが指摘された。一方、多文化共生時代における単一言語の習得を目指すのではない『多言語世界入門』的な授業の導入も重要であると指摘された（大野副センター長）。全体会議では、文部科学省による「高等教育政策の動向と大学に求められているキャリア教育について」の報告の後、岐阜大学により、全体議題「教養教育におけるキャリア教育の現状について」の提案理由説明と事例報告があった。続いて高知大学、千葉大学、山口大学から、事例報告があった。

全学共通教育センター

大野 研

学生の主体性を引き出すー2023年度前期 「教職入門A」の実践の一端からー



写真1 授業最終回の集合写真「やるだけ、やった」という笑顔か

「教職入門A」は、全学教職課程が人文学部、生物資源学部、工学部で教員免許状の取得を目指す学生に開講する授業科目の一つである。今年度は、17名が受講している。本授業は、教職の意義及び教員の役割・職務内容を理解することを目的としてお

り、内容としては、新聞記事や現職教員への質疑応答から学校教育の課題と職務内容具体を概観しようとした。次に、授業づくりと生徒指導分野について、事例を基に、指導の構想を立てさせた。終盤では、受講生が教職を志す起点となった教員を訪ね、インタ

※ 写真1、写真2は、投稿者が各参加者から予め同意を得たうえ掲載したものです。無断転載及び無断使用を固く禁じます。

ビューしたことを報告し合う。まとめとして、それらから得た理解を、教員に必要な資質能力として図式化することを目指した。しかしながら、学校現場に縁遠く、身近に教員の姿を見ていない学生たちは、授業ごとに出会う事象について、共感したり、逆に反発したり、意気消沈したりと大きく揺れた。

一方、本授業では、毎授業終了後に、250字程度のコメントを提出させてきた。当初は、感想に終始していたので、初めに、結語として述べたいことに、表題を付けてから論を展開するように指導してきた。その結果、8回目頃から、すっきり分かるコメントになってきた。しかしながら、揺れる学生たちは、私の返信について、さらに、第2信、第3信と詰め寄り、ていねいに見る程に、私が「多忙化」の真っ只中にいた。そこで、多忙化解消のために、「学生ができることは、全部、学生にやらせる」ことにした。全15回の終盤では、学生が影響を受けた小中高校時代の先生に、「多忙をさらに促進することになるのに、なぜ、その先生は、魅力ある授業をしてくれたのか、時間を割いて接してくれたのか」という

問いを携え、インタビューし、報告する時がある。この報告会の運営を全部、学生にやらせようことにした。学生たちは、結構、準備して臨んだ(写真2)。ある報告で、社会人を経験してから教員になった方から、「ストレートに教員になるな」と伝えられた。強烈な主張であったが、指定質問者は、割と冷静に「それを、(報告者は)どう思うの?」と問うた。報告者は、言葉に詰まりながらも、現在の気持ちを伝えて閉じた。インタビューの報告とは、インタビュー内容を伝達するだけでなく、自分の解釈を付け加えるものであることが分かったようであった。

この報告会以後も、学生が、コメントで述べている部分は、次の授業プリントの項目に「〇〇くん説明」等と記入すると、さらに調べたり、まとめて説明するようになってきた。教員が、きめ細かく指導すれば、多忙となる。しかし、授業のある部分を学生に任せれば、学生が主体的に取り組む姿が見えてきた。「学生は、私が思っているよりも、準備して説明する」、そんな実感が残った(写真1)。

全学資格プログラムセンター
六角 英彰



写真2 インタビュー報告会の様子

教学マネジメント

～三重大学の教育をより良くするために～



小林 一成 教授
教育(教学マネジメント、
リカレント教育)担当 副学長

<役歴>

2007.06～現在 三重大学 教授
2007.04～2007.05 三重大学 准教授
2000.10～2007.03 三重大学 助教授
1997.10～2000.09 三重大学 講師
1992.03～1993.05 Australian National
University Postdoctoral Fellow
1988.04～1997.09 三重大学 助手

この4月より、教学マネジメントを担当することになりました、副学長の小林です。昨年度までは、地域イノベーション学研究科長として、現場で教学マネジメントに沿った作業を進める立場にあり、時にこの煩雑なシステムを批判する側でもありました。それが一転して、教学マネジメントを推進し、教職員の皆様にご協力と呼び掛ける側に回ろうとは、全く想像していなかったところです。就任して4カ月が過ぎたところではありますが、まだまだ知らないこと、理解していないことも多く、勉強が続いている状況です。とは言え、現場で対応する立場も長く経験してきたことを活かして、教職員の皆様から見た教学マネジメントの課題を見つけ、「三重大学の教育をより良くする」ための施策を考えていきたいと考えております。どうかご協力を頂ければと思います。

教学マネジメントに沿った施策の実施は、大学が外部評価を受ける際の重要事項となっているだけでなく、第3期中盤である令和元年度から始まった共通指標による大学評価の対象ともなっており、大学にとって重点的に取り組まざるを得ない状況になっています。前任の苅田前副学長をはじめ、先人たちのご尽力により、これまで三重大学の教学マネジメントは文科省や中教審からのアドバイスをいち早く取り入れ、時にはそれを先取りしつつ、可視化システムの整備などを精力的に進めてきました。この結果、共通指標のうち教学マネジメントに関する項目では同じグループに属する地方国立大学の中で1位を獲得するに至っています。すなわち、これまでの取組によって、本学が大学外に向けて説明責任を果たすための基盤は十分に整ったと言えるでしょう。

そこで今年度は、この基盤を活かし、教学マネジメントを新たな次元に引き上げるため、私自身が各学部・研究科にお邪魔し、

「教学マネジメントのエッセンス」と題してお話する時間を頂きました。その際に強調したことは、これからは教学マネジメントの本質である「三重大学の教育を良くする」ことに、大学をあげて注力しようということです。例えばアンケート調査の結果を可視化するシステムはしっかりと整備されていますので、今後はこのシステムをフル活用するため、アンケートの回答率を限りなく100%に近づけることが次の目標になります。また、当然のことながら、アンケートを取ることは最終目的ではなく、この結果を分析して教育改善につなげることが何より重要です。さらに、改善された点を学生と教職員の皆様にフィードバックし、さらなる改善につなげていく循環の仕組みを作っていかなければなりません。今後は、これらを実現できるよう、教学マネジメントの仕組みづくりを進めていきたいと考えています。

ところで、「良い教育」「良い授業」を目指すと言っても、それは具体的に何を指し、どのように定義されるのでしょうか。各学部・研究科を回らせて頂いた際にも多くの先生方から同様のご質問を頂きました。当然のことながら、「良い教育」「良い授業」には、決まった定義はありません。むしろ、その定義は、ぜひとも教員の皆様お一人お一人にお考えいただきたいと思っています。ただ、「定義」が無かったとしても、何か軸になるものは必要です。本学において「良い教育」に関する軸になるものは「ディプロマ・ポリシー(DP)」だと言えるでしょう。全学のDPを軸に各学部・研究科のDPが定められており、これらを達成するために最善の授業が「良い授業」であると言えるでしょう。また、「三重大学ビジョン2030」の具体的な取り組みを示した「アクションプラン」が間もなく完成しますので、教育に関する「アクションプラン」が本学の教育の1つの軸になってくるでしょう。

以上に述べました通り、教学マネジメントが目指す最も重要な目標は、三重大学の教育をより良くすることです。これは、三重大学を構成する全ての教職員と学生の皆さんがワンチームにならなければゴールを目指すことができない難事業です。

このゴールへの道筋で、皆様を後押しすることができるよう、教学マネジメントの仕組みをより良いものにしていきたいと考えています。引き続き、厳しくも建設的なご意見とご協力の程、よろしくお願いいたします。

高等教育開発デザイン・IRセンター

小林 一成

【参考】本TA研修に関する実施概要

-実施期間：(前期)4月3日(月)～5月12日(金)*

-(*)TA研修必修化による混乱を防止するため、特例として6月1日までに延長し実施致しました。)

-対象：令和5(2023)年度前期以降新規 TA 採用予定者全員

-実施形態：Moodle3.5 を用いたオンデマンド型(非同期型)研修

-URL：三重大学ティーチングアシスタント(TA)ポータル(<https://moodle.mie-u.ac.jp/moodle35/course/view.php?id=16314>)

-各部局における修了者数

人文社会科学部研究科：6人

教育学研究科：3人

医学研究科：27人

工学研究科：347人

生物資源学研究科：174人

地域イノベーション学研究科：16人

全学共通教育センター：91人*

合計：664人

(*各部局における修了者と重複あり)

「教学マネジメント」の意味として合っているものはどちらですか？



三重大学では教学マネジメントの一環として、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーといった、三つのポリシーを制定し、その検証のために、授業アンケート、修学達成度評価、教育満足度調査などの各種アンケート調査を実施しています。各TAの活動においても、こうした「教学マネジメント」を念頭に置きつつ、活動することが大事です。なお、Bは「大学設置基準」を指します。

【画像】TA研修資料(教学マネジメントに関する説明)

令和5(2023)年度前期TA研修実施報告

令和5(2023)年度前期TA研修を実施し、合計664人が無事修了しました。今回のTA研修は、大学設置基準の改正によりTAを務める予定にあるすべての学生が受講する必要性が生じ、さらに、TA研修に投入できるリソースが限られているなかでオンデマンド動画の配信という新しい形式をとった、本学にとっては初めての取組が多いものでした。にもかかわらず、各部局の教員・職員の皆様のおかげで、令和5年度前期においてTAとして雇用されているすべての大学院生587人(教養科目において重複する可能性あり)全員が受講していることが確認されました。TA研修の受講にご協力いただいた本学の教職員の皆様にお礼を申し上げます。以下の表は、今回のTA研修に関わって行った事後アンケート調査の結果です。

質問項目	肯定する回答の割合	合計
内容構成に対する満足度	「満足」60.6%, 「やや満足」35.2%	95.8%
受講方法に対する満足度	「満足」66.5%, 「やや満足」28.0%	94.5%
TA研修が実際のTA活動に役立つと思いますか	「役立つと思う」64.2%, 「やや役立つと思う」32.0%	96.2%

TA研修に対するコメントを求めた自由記述においては、「授業で困っている生徒が一人もいないような環境づくりをしたいです」「受講生にとって受講した価値や満足度を高める為に担当教員と共に努力したい」といったTA活動に対する抱負が寄せられました。

また、TA研修を通じて「三重大学の教育方針についてたくさんのことを学んだ」(注：鄭が和訳)といった留学生の声も届けられました。その他に、「将来も大学の教師になりたいため、今回はかなり貴重な経験と思っています」、「TAとして担当する学生の実りある学びをサポートすることはもちろん、自分自身のスキルアップにも繋がられるTA活動としていきたいです」という風に、TA活動に熱心に取り組むつつ、自身の将来の夢につなげていきたいといった声もありました。各コメントは、本学の大学院生のTAとして目標達成に取り組む行動する力を表しているものと考えられます。

一方、自由記述を通して今回のTA研修の改善点も浮かび上がってきました。例えば、「音声と映像の不一致」、「多言語対応(英語)」といった指摘がありました。高等教育開発デザイン・IRセンターでは、今回の事後アンケートにおいて指摘された課題の解決に加えて、さらなるTA研修の改善に向けて、今後、事前・事後アンケートの実施・比較による効果検証、TA活動後アンケート調査(注：TA活動後の研究に同意した大学院生26人対象)などを実施していく予定です。

高等教育開発デザイン・IRセンター

鄭 漢模

「三重大学360° VRキャンパスツアー」を公開しました

※ お問い合わせ先

学務部入試チーム

飯田

メール: nyusi-2@ab.mie-u.ac.jp

内線: 9063

高等教育デザイン・推進機構アドミッションセンターでは、この度「三重大学360° VRキャンパスツアー」を作成し、令和5年3月31日に本学HP「高校生・受験生応援サイト」にて公開しました。

VRキャンパスツアーは、360° 写真や動画、VR等を組み合わせて、オンラインで疑似的に大学見学ができるコンテンツです。今般の新型コロナウイルスの影響を受け、多くの大学でオンラインによる広報活動が展開されました。その中で、対面での大学見学の代替としてバーチャルキャンパスツアーを公開する大学が増加し、本学でもオンラインで大学の雰囲気やキャンパスの様子を伝える手段として、VRキャンパスツアーを作成することとなりました。

VRキャンパスツアーでは、各学部 of 建物や講義室のほか、食堂や図書館、キャンパスのメインストリートや附属病院など、28か所の360° 写真を公開しています。視聴者は自由に景色を見回すことで実際に大学を歩いているような感覚で見学でき、また同時に、スポットごとに組み込まれた解説文や関連動画などによって、各学部・学科やキャンパスについてより詳しく知ることができます。一部の学部では、普段は関係者しか入れない研究室や実験施設の内部も特別に公開し

ています。パソコン・タブレット・スマートフォンでの視聴に対応しており、VRモードも備えているため、スマートフォンとVRゴーグルを使用することで、一層リアルに体験することも可能です。

バーチャルキャンパスツアーを公開している大学は、全国的には増加傾向ですが、東海・近畿地方の国公立大学ではまだ少ないため、受験生や高校生の皆様にも興味を持っていただけるのではないかと思います。実際に、県外で開催された進学説明会にて、本学のブースに来られた高校生にタブレットでVRキャンパスツアーをお見せした際には、多くの方に興味深くご覧いただきました。

VRキャンパスツアーは、今年度、地域共創プラザ(新第一食堂)や新正門などを追加公開する予定です。今後も、公開箇所の追加や関連写真・動画の充実など、さらなる拡張に向けて検討してまいります。施設・設備や研究室の公開に関して、要望やご意見などがありましたら、アドミッションセンターもしくは入試チームまでお寄せいただけますと幸いです。ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

アドミッションセンター

藤田 達生

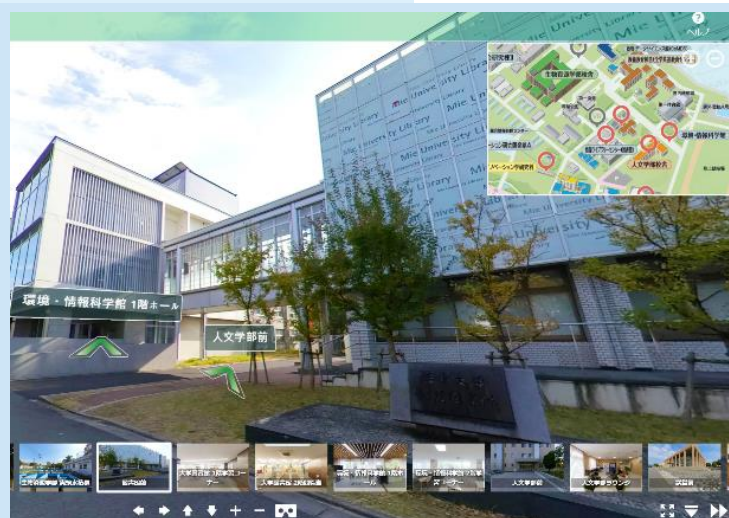


図1 三重大学360° VRキャンパスツアーで見た大学構内



図2 三重大学360° VRキャンパスツアーで見た「スキルズラボ」(室内)

編集後記

高等教育開発デザイン・IRセンター 講師 鄭漢模

三重大学高等教育デザイン・推進機構ニュースレター 第62号をお届けします。今回のニュースレターにも各センターにおける特色ある取組に関する記事が届けられました。

全学共通教育センター大野研先生からご投稿頂いた「令和5年度国立大学教養教育実施組織会議参加報告」については、個人的に「教養教育における地域科目のあり方について」について、地域という捉え方を「県」でなく「北陸」まで拡大し実施したことに興味を持ちました。全学資格プログラムセンター六角 英彰先生からは「学生の主体性を引き出すー2023年度前期『教職入門A』の実践の一端からー」といった記事をご投稿頂きました。参加者の方々が熱心に取り組んでいる様子、また、明るくて素敵な笑顔で笑っている様子を送って頂き、当時の雰囲気が目の前で見ているように伝わってまいりました。写真使用に関してもすでに許可をとって頂いたということで使用させて頂きました。高等教育開発デザイン・IRセンターからは2件の投稿がありました。まず、小林一成先生からは、「教学マネジメント～三重大学の教育をより良くするために～」といった題目で、センター長(副学長)の就任にあたってご挨拶を兼ねて教学マネジメントに関するお考えについてご投稿頂きました。三重大学において「良い教育」とは何かという問いに対してトップダウンでなく、ボトムアップで考えていくことを大事にされているという風に拝読しました。また、鄭からは「令和5(2023)年度前期TA研修実施報告」を投稿致しました。前任者のアドミッションセンター宮下伊吉先生、教務チームの江川さん、中村さん、伊藤さん、そして、各部局の先生方、職員の皆様のおかげで無事終了のうえ、わりと高い満足度を得ることができました。この場を借りてお礼を申し上げます。最後に、アドミッションセンター藤田達生先生からは「三重大学360° VRキャンパスツアー」に関する記事をご投稿頂きました。こちらは他大学ではなかなか見られない企画ですし、より多くの教職員の方々に知って、さらに、利活用して頂けるようになることを願っております。

ニュースレターは、機構に所属する4つのセンターが取り組んだことを、大学内外の方々と共有できる貴重なコミュニケーション手段です。そのような貴重な刊行物の編集に、着任したばかりの私に携わらせていただいたことを大変光栄に思う次第です。なお、本ニュースレターは、各センターに所属する先生方のご協力のもと作成しております。お忙しい中、ご寄稿、ご協力いただきました先生方には、この場をお借りして熱くお礼申し上げます。編集にご助力いただきました教務チームの皆様にも感謝致します。

本ニュースレターに関してご意見・ご感想等がございましたら、下記までお気軽にご連絡ください。

電話:059-231-9392(内線:9392) e-mail:jeonghanmo@hedp.mie-u.ac.jp

創刊日 2008年12月19日

カバー写真 場所:三重大学三翠会館 日時:2023年8月17日 撮影:鄭漢模